資料2

まちづくりの視点と審議会の主な意見

まちづくりの視点		審議会の主な意見
見出し	内容	
舞台（活動・活躍する場）を整える	市民や行政など、宝塚のまちづくりに関わる様々な主体が活動・活躍できる場を整え、協働のまちづくりを推進します。 協働のまちづくりを推進するためには、それぞれの想いを行動に移していくことが大切であり、「やりたい」ことができる環境を整え、つながりづくりに取り組みます。	・人口減少が本格的に始まる中、行政頼りではなく、市民自らがまちをつくっていく時代に入っている。提言書の「わたしの舞台は　たからづか」には、既存の団体のほか、やりたいことがある人や若い人が舞台に上がれるようになればとの想いが込められている ・自己実現できるようにしていくということ。一人一人のまちづくり活動をネットワークすることでうまく循環すると思う ・まちづくり協議会の条例化があるが、自治会の扱いが大きくないことがいびつではないかと思う。
舞台（暮らし）を支える	あらゆる人の暮らしを支え、誰もが幸せに住み続けられるまちづくりを推進します。 子ども、女性、高齢者、障碍（がい）者、困難を抱える若者、性的マイノリティ、外国人などあらゆる人の人権が尊重され、自分らしくいきいきと住み続けられるようお互いさまがあふれるまちづくりに取り組みます。また、人口減少社会を迎え、子育て世代が住んでみたいと思えるまちづくりに取り組みます。	・「女性のまち」というイメージを定着させていくのはどうか。女性に住みやすいまちを追求する ・SDGsの17の分野のうち、日本はジェンダー問題が最も遅れている。宝塚が日本のジェンダー問題をリードするという考えは、SDGsの考えともフィットすると思う ・10歳未満と30歳代が転入超過、20歳代は転出超過となっている。10歳未満と30歳代の転入が多いという特色を消してはいけないと思う。どちらも取れないと思う ・自分の子どもや孫が宝塚市に住むためにはどういう方向を出したら良いかが基本的な眼目だと思う ・近隣市から市民を取ってくるくらいの気迫が必要である ・女性の起業講座を充実してもらいたい ・高齢者が増えていく見込みの中、子どもに対する施策を充実するのか高齢者に対する施策を充実するのか議論になるところである ・障碍（がい）の方や引きこもりの方など、舞台に上がれない方たちもいる。高齢社会では身近なところで舞台が必要。小学校区のまちづくりと、バランスよく地域をつくっていくということをどう捉えるか ・若いお母さんを助ける施策をすれば若い人が集まってくる。若い人の福祉を考えてはどうか ・古いライフスタイルをイメージしてては、若い人を呼べない。一人暮らしでも楽しく、多様な世代と友達になれ、仕事をつくり出せるなどの発想が必要
未来の舞台（まち）につなげる	未来のまちにつなげるため、活力を創出するとともに、将来を見据えたまちづくりを推進します。 本市の豊かな自然や文化など様々な資源を生かすことにより、宝塚ならではの魅力を備えたまちの賑わいの創出に取り組みます。また、常に社会情勢や市民ニーズの変化を的確に捉えながら、限られた経営資源の効率的かつ効果的な配分、広域的な連携など、将来を見据えた行財政運営に取り組みます。	・政府がソサエティ5.0を言っている。これからAIなどがどんどん進出してくる。日本、世界全体の動きを見据えて、大きな変化があっても、柔軟に対応できるような準備を行うといった記載をするべきではないか ・産業の再生、創成、新たな宝塚の付加価値をどう付けるかという経済学的な視点も必要ではないか ・大企業に勤めに行くというスタイルではなく、ローカルに根ざした企業が、地域からどんどん出てきて、ローカルの資源をうまく使いながら、産業あるいは、にぎわいにつなげていくような、新しい産業が育成できれば、宝塚らしさが出てくるのではないか ・これからの時代、各自治体がそれぞれ個別でやるのは限界があり、非効率なので、広域的に手を組み、いろんなものをシェアしていくことが求められてくる ・宝塚市で完結型のまちをつくる必要はなく、考え方を切り替えた方が良い ・産業立国ではなく、他にはない柱が必要ではないか。住民税だけでなく、稼ぐことが必要と思う ・定住社会で良いというのは、その地域の内発性を最大限に生み尽すことが一番の眼目。地域資源をどれだけ掘り起こして、発揮させていくかという視点 ・働く場所をどうつくっていくかという視点がないとじり貧になる